氏　　名	八木　一絵
学　　位	博士（書道学）
学 位 記 番 号	博甲第 99 号
学位授与年月日	2013 年 3 月 22 日
審 査 研 究 科	文学研究科
論　文　題　目	書の概念図による研究方法の試論
論文審査委員	（主査）大 東 文 化 大 学 教 授　河 内　利 治
	（副査）大 東 文 化 大 学 教 授　澤 田　雅 弘
	（副査）大 東 文 化 大 学 教 授　安 達　直 哉
	（副査）大 東 文 化 大 学 准 教 授　吉 永　良 正

八木一絵　博士論文　審査報告

八木一絵氏は、昭和 57 年（1982）6 月 8 日、東京都葛飾区の生まれ。現在 30 歳。平成 15 年（2003）4 月大東文化大学文学部書道学科入学、平成 19 年（2007）3 月同学科卒業。同年 4 月大東文化大学大学院文学研究科書道学専攻博士課程前期課程入学、平成 21 年（2009）3 月同課程修了。修士（書道学）の学位を取得する。同年 4 月同大学院文学研究科書道学専攻博士課程後期課程に入学し、現在に至る。職歴として、埼玉県立松山高等学校非常勤講師（国語：平成 19 年 4 月～平成 20 年 3 月／平成 21 年 4 月～平成 22 年 3 月）、埼玉県立松山高等学校定時制課程非常勤講師（書道：平成 19 年 4 月～現在／国語：平成 23 年 4 月～現在）、埼玉県立川越女子高等学校非常勤講師（国語：平成 20 年 4 月～平成 21 年 3 月）、大東文化大学大学院文学研究科書道学専攻教育補助員（平成 21 年 4 月～平成 23 年 3 月）、大東文化大学人文科学研究所兼任研究員（平成 23 年 4 月～現在）を務めている。

八木氏の専攻は中国書学で、主な研究成果に次の四篇の論考がある。

①「六書とその記号論的解釈について」
『書道学論集』第 5 号、大東文化大学大学院書道学専攻院生会、2008 年 3 月、66～77 頁

②「書体の成立とその記号論的解釈について」
『書道学論集』第 6 号、大東文化大学大学院書道学専攻院生会、2009 年 3 月、68～79 頁

③「仮名の成立とその記号論的解釈について―漢字の成立と比較して」
『書道学論集』第 7 号、大東文化大学大学院書道学専攻院生会、2010 年 3 月、136～143 頁

④「書体の運用とその記号論的解釈について」
『書道学論集』第 8 号、大東文化大学大学院書道学専攻院生会、2011 年 3 月、110～115 頁

以上のほか、平成 21 年度中国文化学会大会で「形式と内容―書における概念の比較」、平成 23 年度書学書道史学会大会で「詩賦と書の創作関係論」を研究発表して考察を深め、併せて葉朗著『中国美学史大綱』訳注（唐五代書画美学・宋元書画美学）を分担執筆しながら未発表の論考も加えて、「書の概念図による研究方法の試論」の題目のもとに研究成果をまとめ、博士学位論文として提出するに至った。

以下、審査結果を報告する。

１、論文の要旨および特色

本論文の執筆動機は、「書の美の評価を客観性と普遍性をもつものにしたい」であった。そのため池上嘉彦『記号論への招待』（論文 p.15）から出発して、独学で記号論を理解し、パース（C. S. Pierce, 1839-1914）の記号分類、すなわち類像（Icon）、指標 （Index）、象徴 （Symbol）の考え方などを参考にして、書の研究方法自体へ新たな可能性を模索した実験的論文である。「書の美」への「新たな研究方法の模索とそれを実験的に試みる研究」「これまでとは些細だが違う説明ができるようになる、方法のアレンジの展開こそが目的であるとも言える」と述べる通りである。これは理想主義的な不可能事であるように思われるが、無謀にも不可能なことに挑戦した不断の努力をまずは評価しておきたい。

序論

１研究目的

２先行研究

【第一段階　時間と場所】【第二段階　書の研究というと】

【第三段階　中国文化の研究の余地】【研究目的】

３研究方法

【記号学や記号論を書に用いた理由と根拠】

【記号論が応用できると思った一番初めの理由】

【書は記号になりうるか】【書と記号論の相違点と本研究の有用性】

【記号学・記号論のうちの】【章立て】

序論注

第一章　記号論を用いた書の「核」の一考察

第一節　書を記号として考える概念図の作り方

【概念図を作る目的】【概念図の根本】【形式の分類】【書の内容の概念の分析】

【書の形式と内容の概念上の違い】【他の解決法として立体的に組み合わせてみる】

第二節　書の内容の記号学的考察

【文学研究のうち詩的言語】【詩学による「赤壁賦」小考】【コーパス言語学】【文字】

【ナラトロジー】【文学的考察を通じて】
第三節　書の形式の記号学的考察
【筆づかい】【文字】【書体】【文字同士の空間と流れ】【紙面上の配置】【用具】【表装】
【形式的考察を通じて】
第四節　書の「核」の持たせ方　―小結にかえて
【場合１】【場合２】【場合３】【中国の美学との絡め方】
第一章注

第二章　書の文化記号論
第一節　本章の研究の視座
第二節　書の文字使用に関する記号論的一考察
【六書とその記号論的解釈について】
【書体の成立とその記号論的解釈について】
【書体の運用とその記号論的解釈について】
【仮名の成立とその記号論的解釈について―漢字の成立と比較して】
第三節　小結１　名付ける
第四節　小結２　文字の抽象化の単位と文字の絵画性の持たせ方
―そこにみられる漢字はラング→パロールかパロール→ラングかの問題も含め
第二章注

第三章　書の芸術記号論
第一節　生命の表出をする形式と内容の混在
第二節　意の考察１
第三節　意の考察２
【前赤壁賦巻】【黄州寒食詩巻】【李太白仙詩巻】【三作品の考察の結】
第四節　小結
第三章注

結論
結論注

以下、各章ごとに論文の要旨および特色を記述する。

序論

本論文の研究目的は、書の新たな研究方法の模索がひとつ、またそのようにして見出した研究方法を実験的に試みることがもうひとつである。この書の新たな研究方法の模索を

明確にするため、【第一段階　時間と場所】【第二段階　書の研究というと】【第三段階　中国文化の研究の余地】の項目をたて、これまでの「書の研究」自体の傾向を調査すると、既知のものに対して深く研究をすること、知を求める場合が多いことがあきらかになる。ゆえに新たな研究方法の余地の考察を行い、【研究目的】を「概念的な体系化」であると明示する。またこのような学問の体系化とそれを確かめる実証によって、これまでの主たる研究の補完的な研究方法を目指す。

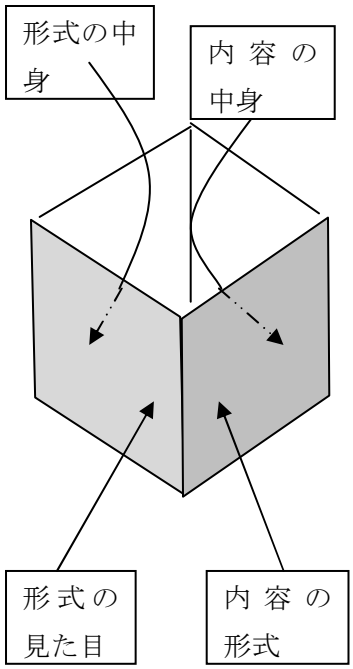
新たな研究方法のてがかりとして、記号学・記号論を選んだ。その最大の理由を【記号学や記号論を書に用いた理由と根拠】【記号論が応用できると思った一番初めの理由】の項目をたて考察する。書は現在に至るまで作品作りや研究が続いていることから、ひとびとが意識してきた文化と言える。そして記号学や記号論の基本的性格として、ひとびとがものごとに対しそのものごと自体も含めて意識の持ち方がいかなるものかに着目しているかの哲学であるので、有効と判断して用いる。

実際に書に記号学・記号論を用いることができるのかを、【書は記号になりうるか】【書と記号論の相違点と本研究の有用性】【記号学・記号論のうちの】の項目をたて、順序を追って考察し、用いることができるとし、記号学や記号論のうち、どの考え方に則るのかを示す。

その結果、「書の概念図による研究方法の試論」と題し、第一章から第三章の【章立て】で、研究方法の模索と作品や書論などを用いた研究方法の検証とを繰り返しつつ進めると論じる。

第一章　記号論を用いた書の「核」の一考察

「第一節　書を記号として考える概念図の作り方」では、書とは、ことばを書くという見方ができるので、ことばと書とをいったん分けて分析する研究方法を模索する。まず、人の意識の中でことばと書との組み合わせ方がどのようになるか、模索しつつ図式化する。書の形式である書芸術の面と書の内容である言語芸術の面があり、それぞれにさらにかたちと中身があると考える。結果その両面を組み合わせた立体になるという方法を打ち出す。右図参照。この図は、書論を分かりやすく読解するための図であるのみならず、記号学を用いる最大の長所である、概念や認識に近い図として成立しうる。右図の如く、書とことば各々の面には、どのような芸術的な要素を持たせることができるのかという視点の持ち方の考察と、それに基づく要素の項目の列挙を行う。



「第二節　書の内容の記号学的考察」「第三節　書の形式の記号学的考察」では第一節を受けて、書芸術の面と言語芸術の面、各々の視点の持ち方と意味の持たせ方の考察を行う。

「第四節　書の「核」の持たせ方―小結にかえて」では、書芸術・言語芸術両者に関わる美学へ論を移行する。

中国で伝統的に論じられてきた美を、如上のような図に組み込んで概念的に表す方法自体を場合分けして考察する。そしていままで主観で説明されていた方法によっていた美学が、その作品からはどのようにして精神的な意味や構造が浮かび上がってくるのか、作品はどのようにその質を私たちに訴えてくるのかといった、今まで注目されてこなかった美を表す「筋道」を「図式化」できるようになる。中国美学の用語の意味との照合は第三章で行う。

第二章　書の文化記号論

「第一節　本章の研究の視座」は、第一章で、文字が書とことばの両者共通の要素であると考察しえたので、第二章ではそれがどのように影響を与えるのかを中心に論じる。

「第二節　書の文字使用に関する記号論的一考察」は、文字、とくに漢字の形と意味の成立と変遷、そして形では、使用にあたって述べられている書論までを含め、それら各々を場面ごとに繰り広げられた様相を考察する。

【六書とその記号論的解釈について】は、漢字の義の生成に注目し、漢字という文字の抽象と具体のはざまでどのような運動を続けてきたのか、書の根底にある見えざる思想の分類と、その分類から絵画の象徴性との違いを明らかにする考証も兼ねて考察する。

【書体の成立とその記号論的解釈について】【書体の運用とその記号論的解釈について】は、漢字の形の生成と運用各々に注目し、六書同様、書体の抽象と具体との運動に注目し分類を行う。

【仮名の成立とその記号論的解釈について―漢字の成立と比較して】は、中国書法と日本書道の違いを、文字の観点から明確にするため分類を行う。

「第三節　小結１　名付ける」は、第二節の考察によって分類された六書や書体などに対し、多くの用語作成と体系化を行う。漢字に共通して言えることは、その変遷が文字単位であっても、部分であっても、従前にあったものを連想するような営みを経て転用する発想が根底にあり、循環型に増量していると論じる。仮名に対しては、その考察と漢字の見解を組み合わせて、用語作成と体系化を行う。

「第四節　小結２　文字の抽象化の単位と文字の絵画性の持たせ方―そこにみられる漢字はラング→パロールかパロール→ラングかの問題も含め」は、漢字と仮名を比較するため、アルファベットを間接的に比較して考察した。それは文字における意識の向け方の考察である。漢字は点・画・線を単位とし、それを組み合わせて意味を増産していくという流れになるとし、アルファベットは音だけで意味が無いとしてきたものが組み合わさって意味があらわれ、そしてそのようなもの自体で単位にもなるし、それを組み合わせ単語になるとも考えた場合においても、この両者は似ていると考察する。対して仮名は文字が単位で、そこからさかのぼるように点・画・線へと意識が向き、また逆方向の配置などに広

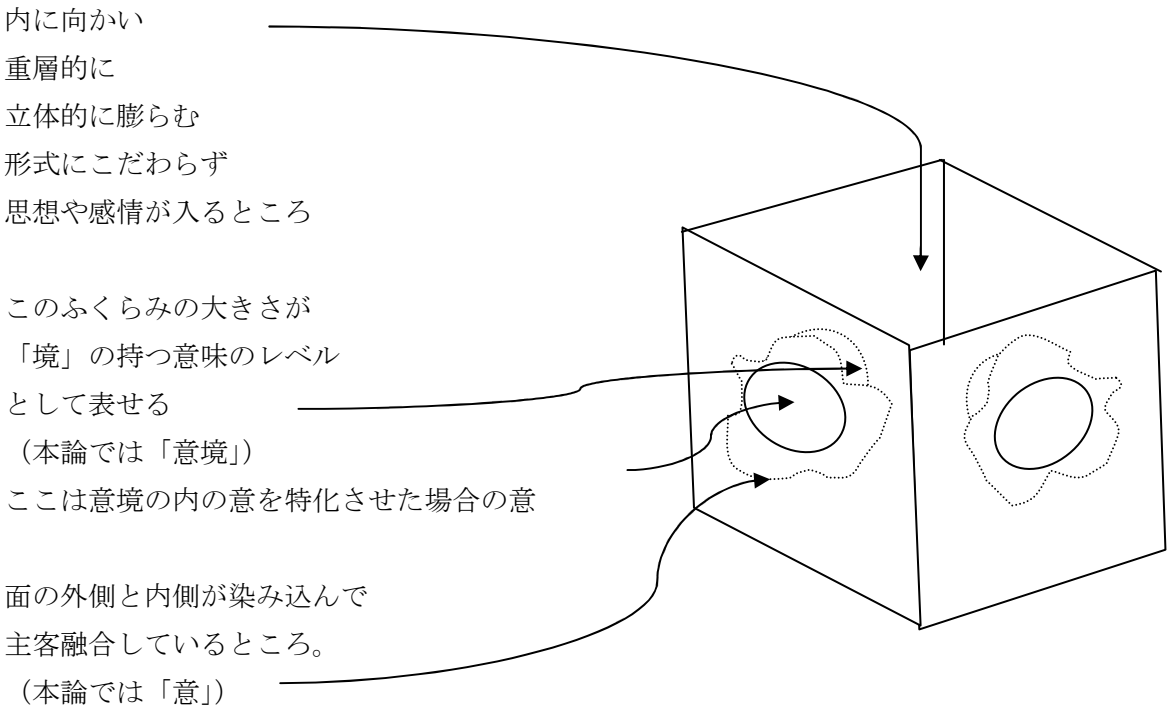
がるとし、音をあらわすアルファベットと似ているようであるが文字の使い方は似ていないという一面もあると述べる。

また、このような文字観のちがいは、書以外の文字使用の嗜好性にもつながるのではないかという可能性も提示する。

第三章　書の芸術記号論

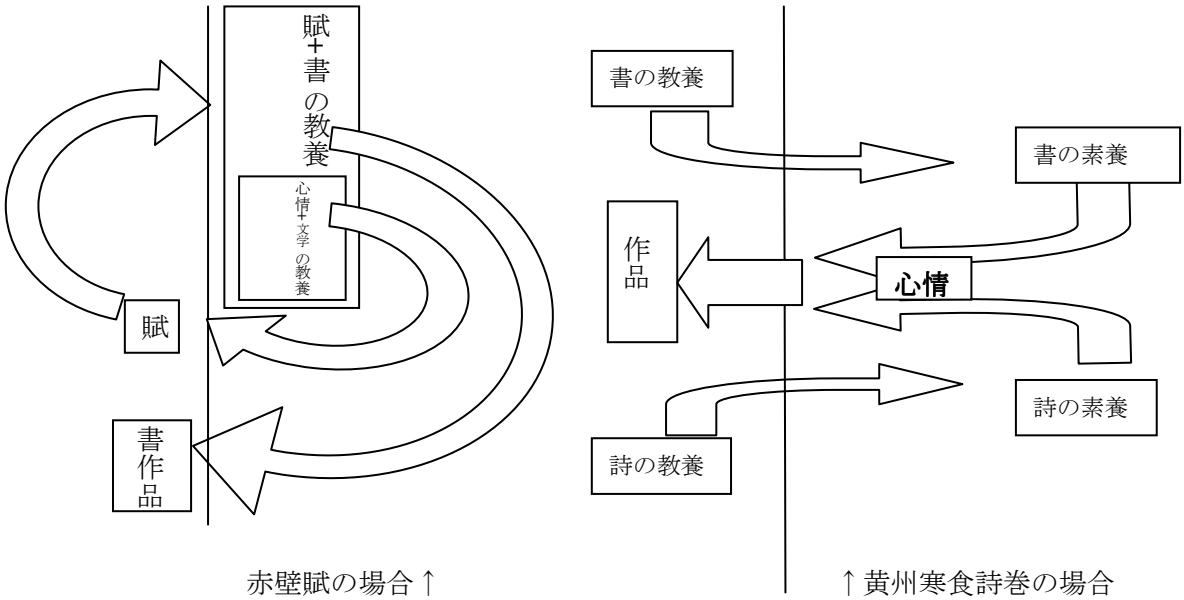
象徴記号に特化した芸術の記号論の発想にもとづき、中国の美学用語を図にはめ込むことによる考察と実証を行うことを一番の目的とする。

「第一節　生命の表出をする形式と内容の混在」は、書という芸術の世界と美の在り方に迫る方法の模索が目的であることを論じる。「第二節　意の考察１」の「意」は、その意味の考察をふまえ、作品の「こころ」を表すことばであるとし、見た目、中身ともに染み入り表出しているよう位置づける。さらに発展させて「意境」のようにかたちなどの具体的直接的意味で迫る美ではないような世界観を表すような美、つまり精神的象徴的意味にも、これまでとは違う形で表わすことができるとする。具体的には第一章で示した図の続きとして下図を作成し得た。



「第三節　意の考察２」は、第二節により「意」で代表される宋代の芸術観にも迫るような応用の仕方が可能になったので、小説の作者とその話の語り手の関係の研究を応用し、文学作品を作るタイミングと書するタイミングの時間差を利用し、蘇軾の作品三点【前赤壁賦巻】【黄州寒食詩巻】【李太白仙詩巻】を採り上げて、具体的な試論を展開する。創作

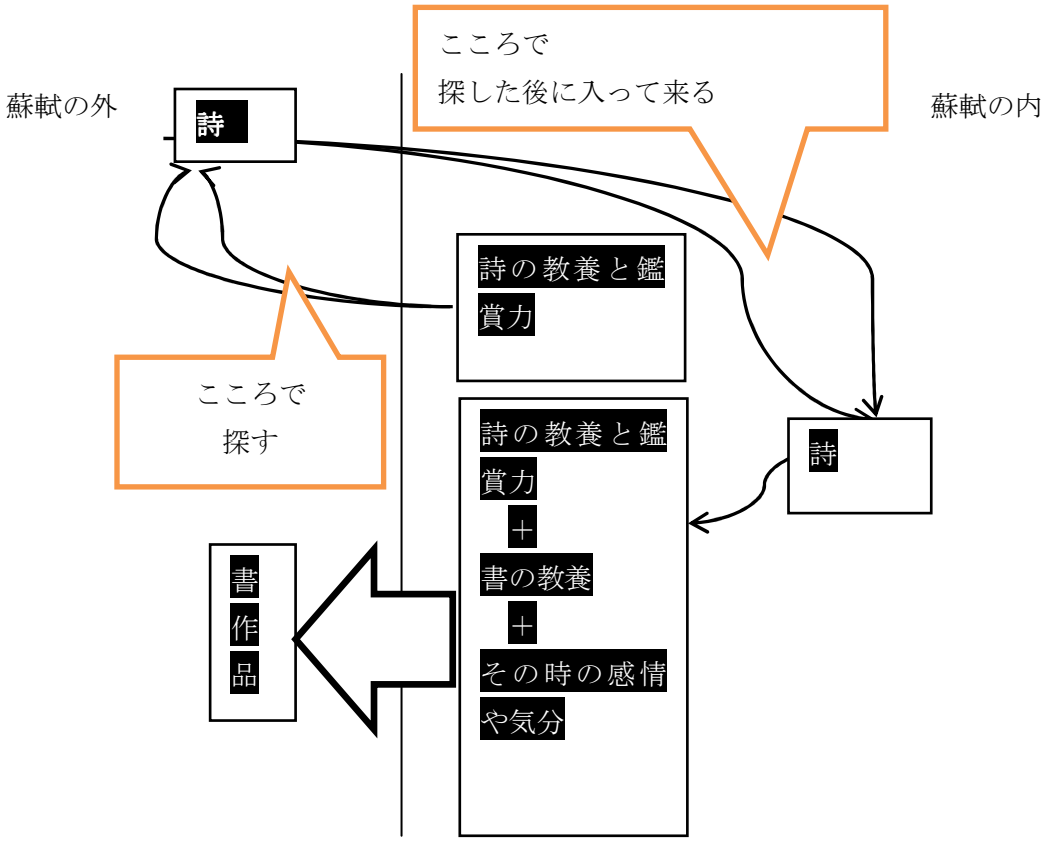
時の意のこめ方の場合分けと考察を図式化すると以下のようになる。



赤壁賦の場合↑

李太白仙詩巻の場合↓

↑黄州寒食詩巻の場合



「第四節　小結」は、中国の芸術観をも考察すると、書と絵画とは異なる象徴のこめ方になることを図式化することができ、書画の差異に対する論拠にも今後使用することが可能である点に言及し、芸術記号論としての書についてまとめる。

結論

各章の研究成果以外に、全体の成果として大きく次の二つを挙げる。

まず、一貫して概念や認識といった人間の精神活動をどのようにとらえるのかという関係で論じることができた点である。すなわち従来の研究方法では、芸術作品の精神「性」を追求することが美学研究では展開されてきたが、記号学や記号論を用いると、主観に対する客観視までを持つ哲学、という性格を生かしたアプローチができる点である。

二つ目に、言語との関係で論じることができた点である。すなわち書はことばが用いられており、記号学・記号論は言語にも大きく関わる哲学であるので、従来の研究で論じられる場合は「概念の図式化」が難しく、深い鑑賞とは反対に言語との関わりでも同様の盲点になっており、その点にも言及できた点である。

序論に「これまでとは些細だが違う説明ができるようになる、方法のアレンジの展開こそが目的であるともいえる」と述べたが、本論は詳細化、明確化の研究方法に加え、大きな視点から紐解く研究方法の叩き台を構築した論文となったと考える。

２、論文の審査内容および評価

本論文は序論、第一章～第三章の本論、結論からなる。本論は、各章が関連性をもつ構成のため、見通しが明確で適切な展開になっていることを、はじめに評価しておきたい。

第一章は書の「美」の客体面である書の「核」に関する、いわば語用論的な分類および概念図の構成の試みである。書を形式と内容に分け、両者をさらに、美を判断中止した即物的側面である①と、美的判断を含意した解釈的側面である②に分割し、そうしてできた４つの側面から構成される概念空間の中に、「核」の布置を定位しようとしている。

また、通時的・共時的の二分法では捉えられない書に特有の時間性を、「彼時的」と呼んで、概念図に組み込む試みをしている。

第二章は書の構成要素である文字に関する、いわば統辞論的な分類と解釈の試みである。イコン・インデックス・シンボルの独自の解釈による分類をする。文字を「心のこもった物質」、「深さのある物質」と定義しているのも面白い観点である。

第三章は書の「美」の主体面である書の「意」に関して、第一章と第二章の結果を応用した、いわば意味論的な読解の試みである。

しかし、いくつかの大きな問題点を指摘しなければならない。

１．「彼時言語学」（p.4）は、八木氏の造語であろう。ソシュールの共時 synclonique、通時 diaclonique の二分法に対し、「その時代の特徴を学ぶ、時代自体にピンポイント性を持たせる」研究法とある。ただし、それ以上に踏み込んだ定義や解説がない。欧米語での接頭詞も記されていないので、概念上の意味がよくわからない。

２．フーコーの『言葉と物』からの引用（p.9）によって、書道への記号論の適用を“知の考古学”になぞらえているが、かなりの誤解（誤読）がある（特に「延長」の解釈）。むしろ、八木氏の論文そのものが、フーコーのいうシナのエピステーメーの典型になってい

る。その自覚があれば、論文にはもっと深みがもてたはずであり残念である。

３.「ソシュール、バルト、パース、ランガーの考え方を採用したい」（p.19）と羅列されているが、この順序は論文での登場順である。この４人では、同じ用語でもかなり意味合いが異なる。たとえばキーワードである Symbol にしても、ソシュールではイコンの意味に近く、パースでは社会規約的な意味が強く、ランガーはカッシラーの思想を継承して構想力を重視し、Connotation もバルトの専売特許ではない。その他の用語もその訳語はさまざまで、誰のどれを採用するかでその意味もおのずと変わってくる。残念ながら、八木氏はそのあたりの事情にかなり無自覚なまま、転用、多用している。一因は、原典ではなく、二次文献に依拠したことにある。

４．書道の分析に使用される用語や概念装置はすべて、引用で説明されている。簡単な言い換えがある場合も、的外れの解釈になっていたりする。しかし、引用文に対しては的外れでも、その解釈で一貫して分析していくのだから、それらの用語や概念装置はそういうものだと自分の言葉で定義しておけばよいのであって、引用を外せばすっきりする。たとえば、ナラトロジーやコーパス言語学は、論文中の分析で使っているのは基本的な考え方だけで、それらにどうしても言及せざるを得ないようなテクニカルなところまでは行っていないのだから、持ち出す必要はないであろう。また、統辞論・意味論・語用論の、記号論の三分類にしても、せっかく使える概念なのに引用だけで終わっていて有効に活用されていない。加えて、章タイトルにある「文化記号論」「芸術記号論」ということばも、定義と説明抜きで使われていて意味不明である。

５．逆に言い足りないのが、論文の実質的な中心概念である書の「核」と「意」についての概念的考察である。書の「核」とは、書の「美」のいわば客体面であり、「作品を作品たらしめる、芸術として人の心で判断するような何か」（p.65）とある。しかし、これでは「書を美しいと感じさせるもの」と言い換えたにすぎず、同語反復であろう。究明すべきものをあらかじめ前提しているやり方は、第一章冒頭の、概念図作りのための形式・内容の①と②の分け方も同様である。②は「人々が良いと感じる」（p.29）とあり、ここでも説明すべき「美」を前提しなければ理解できない。もちろん「美」のような概念は、解釈学的循環をもってしか究明できない、というのが哲学的解釈学の成果でもあるのだから、そのことを自覚的に表明しておけばよいのである。書の「意」とは、書の「美」のいわば主体面（作者および鑑賞者の）であり、「芸術を創作するときの」「一番広い意味でのこころ」（pp.151-152）とあるが、ここでも同語反復・結論先取りの印象は免れない。「意」は西洋的には何に当たるのか、あるいは該当する概念はないのか。そのあたりの考察が必要であろう。

とはいえ、以上の試みはすべて独創的なものであり、その成功不成功の如何に係わらず、意義を持つと考えられよう。というのも八木氏のように、既成の学問体系に挑戦する者はおのずと評価が分かれるものである。しかしそのような者を評価することが、さらに多くの挑戦者を生みだすことになり、学問は発達する。そこに本論文の最大の意義、特色があ

ると考える。電磁気学にたとえれば、本論文はさまざまな現象の観察や実験から法則性を見出そうとしたファラデーまでの模索の一段階に当たろう。電磁気学が真に普遍性を持つ知となるためには、マクスウェルの天才を俟たねばならなかった。しかし、ファラデーがいなければマクスウェルの登場もなかったのだから、実験的試みの蓄積には大きな意義があるといえる。

よって本論文は研究目的として掲げた「書の新たな研究方法の模索とそれを実験的に試みる研究」という点では、一定の成果を達成しており、意義のある論文と判定できる。

３、結論

審査委員会は、本論文の審査を委嘱されて以来、直接の指導を行い、口述試験を行った。口述試験では、各委員が本論文に対して質疑した。氏は全質問に率直に回答し、謙虚な態度に終始した。最終的に審査委員会は全委員一致で、口述試験を合格と判断した。以上の審査内容および評価に基づき、本論文を審査の対象とする博士学位審査委員会は、八木一絵氏が博士（書道学）の学位を授与されるに適格であるものと判断し、ここに報告する。